

怪力

泉鏡太郎

青空文庫

孰れが前に出来たか、穿鑿に及ばぬが、怪力の盲人の物語りが二ツある。同じ話の型が變つて、一ツは講釈師が板にかけて、のんくづいくと顛はす。一ツは好事家の随筆に、物凄くも又恐ろしく記される。浅く案ずるに、此の随筆から取つて講釈に仕組んで演ずるのであらうと思ふが、書いた方を讀むと、嘘らしいが魅せられて事実に聞こえる。それから講釈の方を見ると、真らしいけれども考えさせず直に嘘だと分る。最も上手が演ずるのを聞いたら、話の呼吸と、声の調子で、客をうまく引入れるかも知れぬが、こゝでは随筆に文章で書いたのと、筆記本に言語のまゝ記したものとを比較して、おなじ言葉ながら、其の力が文字に映じて、如何に相違があるかを御覽に入れやう。一ツは武勇談で、一つは怪談。

先づ講釈筆記の武勇談の方から一寸抜き取る。——最も略筋、あとで物語の主題とも言ふべき処を、較べて見ませう。

で、主題と云ふのは、其の怪力の按摩と、大力無双の大將が、しつぺい張くら、をすると言ふので。講釈の方は越前国一条ヶ谷朝倉左衛門尉義景十人八人の侍大將の中に、黒坂備中守と云ふ、これは私の隣国。随筆の方は、

奥州会津に諏訪越中と云ふ大力の人ありて、これは宙外さんの猪苗代から、山道三里だから面白い。

越中、此の随筆が出、越中だとすると、何のために、奥州を越前へ移して、越中を備中にかへたらう、ソレ或ひは越中は禪に響いて、強力の威厳を傷けやうかの深慮に出たのかも計られぬ。——串戯はよして、些細な事ではあるが、おなじ事でも、こゝは大力がよい。強力、と云ふと、九段坂をエンヤラヤに聞こえて響が悪

い。最も随筆の方では唯、大力の人あり、としたゞけを、講釈には恚うしてある。

(これは越前名代の強力、一日狩倉に出て大熊に出逢ひ、持てる鎗は熊のために喰折られ已む事を得ず鉄拳を上げて熊をば一拳の下に打殺しこの勇力はかくのごとくである) 其の熊の皮を馬標とした。

と大看板を上げたが、最う此の辺から些と怪しく成る。此の備中、一時越前の領土巡検の役を、主人義景より承り、供方二十人ばかりを連れて、領分の民の状態を察せんため、名だゝる越前の大川、足羽川のほとりにかゝる。ト長雨のあとで、水勢どうくとして、渦を巻いて流れ、蛇籠も動く、とある。備中馬

を立て、

「頗る水だな。」

「御意、」と一同川岸に休息する。向ふ岸へのそくと出て来たものがあつた。
 (尖へ玉のついた長杖を突き、草色、石持の衣類、小倉の帯を胸高で、身の丈六尺あまりもあらうかと云ふ、大な盲人)——と云ふのであるが、角帯を胸高で草色の布子と来ては、六尺あまりの大な盲人とは何うも見えぬ。宇都谷峠を、とぼ／＼と行く小按摩らしい。

——此の按摩杖を力に、川べりの水除け堤へ来ると、杖の先へ両手をかけて、ズイと腰を伸ばし、耳敬て、考えて居る様子、——と言ふ。

これは可い。如何にも按摩が川岸に立つて瀬をうかゞうやうに見える、が、尋常の按摩と違ひがない。

かみしもなんびやくもん
 上下何百文を論ずるのぢやない、怪力を写す優劣を云ふのである。

出水だ危い、と人々此方の岸から呼ばつたが、強情にものもしないで、下駄を脱ぐと杖を通し、帯を解いて素裸で、ざぶくと涉りかける。呆れ果て、眺めて居ると、やがて浅い処で腰の辺、深い処は乳の上になる。最も激流矢を流す。川の七分目

へ来た処きところに、大巖おほいはが一つ水を堰みづせいて龍虎りゅうこを躍おどらす。按摩巖あんまの前にフト留とまつて、少時しばらく小首こくびを傾かたむけたが、すぐに禪杖ぜんじょうをさした。手唾てつばをかけて、ヤ、曳えい、と圧おしはじめ、ヨイシヨ、アリヤ〜、ザブーンと転ころがす。

備中びつちゅう驚おどき嘆たんじ、無事ぶじに涉わたり果はてた按摩あんまを、床しやうぎ几ちかに近ちかう召寄めしよせて、

「あつぱれ、其その方ほう、水みづにせかるゝ大巖おほいはを流ながれさかひ押おし転ころばす、凡およそ如何いかばかりの力ちからがあるな。」

すると按摩あんまが我われながら我わが力ちからのほどを、自みづから試こころみた事ことがないと言いふ。

「汝音なんおとにも聞ききつらん、予よは白山はくさんの狩倉かりくらに、大熊おほくまを撲うち殺ころした黒坂備中くろさかびつちう、此この方ほうも未いまだ自じ分に力ちからを試ためさん、いぎふれ汝なんぢと力ちから競くらべして見みやうか。」

「へゝゝゝ、恐おそれながら御意ごいにまかせ、早速さつそくおん対手あひて」と按摩あんまが云いふ。

さて、招魂社しやうこんしゃの觀世物みせもので、墨すみのなすりくらをするのではないから、盲人まうじんと相撲すまふもいかゞなもの。

「シツペイの打うちくらをいたさうかの。」

「へゝゝゝ、おもしろうござります。」

「勝かつたら、御褒美ごほうびに銀二枚ぎんまい。汝なんぢ負なけたら按摩あんまをいたせ、」と此処こゝで約やく束そくが出来できて、さ

て、シツペイの打くらと成る。

「まづ、御前様。」

「心得た。」

「へへへへ」

と出した腕が松の樹同然、針金のやうな毛がスクク見える。

「参るぞ。」

うん、と備中、鼻膩を引いた——とある。

宜いか按摩、と呼ぼつて、備中守、指のしなへでウーンと打つたが、一向に感

じた様子がない。さすがに紫色に成つた手首を、按摩は擦らうとせず、

「ハ、ハ、蕨が触つた。」

は、強情不敵な奴。さて、入替つて按摩がシツペイの番と成ると、先づ以つて盆の

扱にありつきました、と白銀二枚頂戴の事に極めてかゝつて、

「さあ、殿様お手を。」

と言ふ。其処で渋りながら備中守の差出す腕を、片手で握添へて、大根おろしに

ズイと扱く。とえ、擦つたい処の騒ぎか。最う其だけで痺れるばかり。いや、此の勢で、

的まともの面にシツペイを遣やられた日ひには、熊くまを挫ひしいだ腕うでも砕くだけやう。按摩あんま爾そのとき時はな鼻あぶら脂で、

「はい御免ごめん。」

かたはらひかト傍かたはらひかに控ひかへた備びつちう中ちうの家来けらい、サソクに南蛮鉄なんばんてつの鐙あぶみを取とつて、中なかを遮さへぎつて出だした途端とたんに、ピシリと張はつた。

「アイタタ。」

と按摩あんまさすがに怯ひるむ。備びつちう中ちう苦笑にがわらひをして、

「力は其ちだけかな、さて〜思おもつたほどでもない。」

と負まけ惜をしみを言いつたものゝ、家来けらいどもと顔かほを見合みあはせて、舌したを巻まいたも道理だうり。鐙あぶみの真中まんなかが其そのシツペイのために凹くぼんで居ゐた——と言いふのが講かう釈しやくの分ぶんである。

さて此この趣おもむきで見ると、最さい初しよから按摩あんまの様子やうすに、逆とても南蛮鉄なんばんてつの鐙あぶみの面つらを指ゆびで張はり窪くぼますほどの力ちからがない。以い前ぜん激流げきりうに逆さかつて、大石だいせきを転ころばして人助ひとたすけのためにしたと言いふ

のも、第だい一いち、かちわたりをすべき川かはでないから石いしがあるのが、然さまで諸人しよにんの難儀なんぎとも思おもはれぬ。往わう来らいに穴あながあるのとは訳わけが違ちがふ。

処ところで、随筆ずゐひつに書かいた方は、初手しよてから筆者ひつしやの用意よういが深ふかい。これは前まへにも一寸言ちよつとつた。

——奥州会津おうしうあひづに諏訪越中すはまつちうと云いふ大だい力りきの人ひとあり。或ある一ひと年ねん春はるの末すゑつ方遠乗かたとほのりかた／＼

白岩の塔を見物に、割籠吸筒取持たせ。——で、民情視察、巡見でないのが
 先づ嬉しい。——供二人三人召連れ春風と言ふ遠がけの馬に乗り、塔のあたりに至り、
 岩窟堂の虚空蔵にて酒をのむ——とある。古武士が野がけの風情も興あり。——帰路
 に閻川橋を通りけるに、橋姫の宮のほとりにて、丈高くしたゝかなる座頭の坊、——
 としてあるが、宇都谷峠とは雲泥の相違、此のしたゝかなるとばかりでも一寸燈は
 窶ませられる。座頭、琵琶箱を負ひて、がたりびしりと欄干を探り居たり。——琵琶箱
 負ひたる丈高きしたゝかな座頭一人、人通もなき閻川橋の欄干を、杖以てがたり
 びしりと探る——其の頭上には怪しき雲のむらくとかくるのが自然と見える。分けて
 爰に、がたりびしりは、文章の冴で、杖の音が物凄く耳に響く。なか／＼口で言つ
 ても此の味は声に出せぬ。

また此の様子を見ては、誰も怪まずには居られない。——越中馬を控へ、坐頭の坊何
 をする、と言ふ。坐頭聞いて、此の橋は昔聖徳太子の日本六十余州へ百八十の橋を
 御掛けなされし其の内にて候よし伝へうけたまはり候、誠に候や、と言ふ。

成程それなりと言ふ。

座頭申すやう、吾等去年、音にきゝし信濃なる彼の木曾の掛橋を通り申すに、橋

杭立ち申さず、谷より谷へ掛渡しの鉄の鎖にて繋ぎ置き申候。其の木曾の掛橋と景色は同じ事ながら、此の橋の風景には歌よむ人もなきやらむ。木曾の橋をば西行法師の春花の盛に通り給ひて、

生ひすがふ谷のこずゑをくもでにて

散らぬ花ふむ木曾のかけ橋

また源の頼光、中納言維仲卿の御息女を恋ひさせ給ひて、

恋染し木曾路の橋も年経なほ

中もや絶えて落ぞしぬめり

此のほか色々の歌も侍るよし承り候と言ふ。——此の物語、優美の中に幻怪あり。六十余州往来する魔物の風流思ふべく、はた是あるがために、闇川橋のあたり、山聳え、花深く、路幽に、水疾き風情見るが如く、且つ能樂に於ける、前シテと云ふ段取にも成る。

越中つく／＼聞いて、見かけは弁慶とも言ふべき人柄なれども心だての殊勝さは、喜撰法師にも劣るまじと誉め、それより道づれして、野寺の観音堂へ近くなりて、座頭傍の石に躓きて、うつぶしに倒れけるが——と本文にある処、講釈の

すなはあすはがはちうりう
即ち足羽川中流の石なのであるが、比較して言ふまでもなく、此の方が自然で、且つ
変化の此の座頭だけに、観音堂に近い処で、躓き倒れたと云へば、何となく秘密の約
束があつて、ゾツとさせる。——座頭むくと起直つて、腹を立て、道端にあつて往
来の障なりと、二三十人ばかりにても動かしがたき大石の角に手をかけ、曳やつとい
ふて引起し、目より高くさし上げ、谷底へ投落す。——いかにも是ならば投げられ
る、——越中これを見て胆を消し、——とあつて、
「さてく御座頭は大力かな、我も少し力あり、何と慰みながら力競せまじきか。」
と言ふ。我も少し力ありて、やわか座頭に劣るまじい大力のほどが想はれる。自から熊
を張殺したと名乗るのと、どちらが点首されるかは論に及ばぬ。

座頭聞いて、

「御慰みになるべくは御相手仕るべし。」

と言ふ。其処で、野寺の観音堂の拜殿へ上り、其方盲人にて角舩は成るまじ、腕
おしか頭はりくらか此の二つの中にせむ。座頭申すは、然らばしつぺい張競を仕
候はんまゝ、我天窓を御張り候へと云ふ。越中然らばうけ候へとて、座頭の天窓へし
たゝかにしつぺいを張る。座頭覚えず頭を縮め、面を顰め、しばし天窓を撫で、

「さてく強き御力かな、そなたは聞及びし諏訪越中な。さらば某も慮外ながら
 一しつぺい仕らむ、うけて御覽候へ。」

とて越中が頭を撫で、見、舌赤くニヤリと笑ひ、人さし指に鼻油を引で、しつぺい
 張んと齒齧をなし立上りし面貌——と云々。恁てこそ鬼神と勇士が力較べも
 壮大ならずや。

越中密に立つて鐙をはづし、座頭がしつぺいを鐙の鼻にて受くる。座頭乗かけ声をか
 け、

「曳や、」

とはつしと張る。鐙の雉子のもゝのまがりめ二ツ三ツに張碎けたり。

「あつ、」

と越中、がたり鐙を投げ出し、馬にひらりと乗るより疾く、一散に遁げて行く。座頭腹
 を立て、

「卑怯なり何処へ遁ぐる。」

と大音あげ、追掛しが忽ちに雲起り、真闇になり、大雨降出し、稲光烈しく、
 大風吹くが如くなる音して座頭はいづくに行しやらむ——と言ふのである。前の講

物の 釈く
 らしい のと 読よみ
 方が、 較くら
 べると、 却かへつて 事じ実じつ
 に見みえるのが 面おも白しろ
 い。
 此この天てん狗ぐ
 か 化ばけも

青空文庫情報

底本：「新編 泉鏡花集 第十卷」岩波書店

2004（平成16）年4月23日第1刷発行

底本の親本：「桜草」文芸書院

1913（大正2）年3月18日

初出：「新小説 第十四年第六卷―第十四年第七卷」春陽堂

1909（明治42）年6月1日―7月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「怪力《くわいりき》」となっています。

※初出時の署名は「泉鏡花」です。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怪力

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>